

B-179 被服における色彩と図形の知覚に関する研究
名古屋女子大家政 ○ 壁谷久代
福山女学園大家政 加藤雪枝 福山藤子

目的 被服における色彩と形態の知覚に関する問題は、その要因が複雑であるために直接解明することは難しい。これらの色彩と形態とは別々に検討される場合が多いが、実際には知覚現象の中で共存するものである。知覚は外界の物理刺激によって起こるもので人間の判断にはまず知覚する過程があり、次に感情効果が働くと考えられる。従って知覚閾と感情効果は、次元が異なるためにこれまでは個々に研究されてきたが、これらはすべて包含して考える必要がある。そこで被服における色彩と図形とが知覚閾や感情効果にどのような関連性をもつかを検討し、被服着装上の知覚要因を明らかにする。

方法 最も基本的な色彩と幾何学図形を取りあげ、それぞれの知覚閾を求め、因子分析により試料を分類した結果、重要と思われる色彩と図形を選定した。これらを合成して知覚閾および感情効果を求め、両者の関係を数量的に検討した。さらに平面上で取り扱った図形を実際に被服地の模様としてワンピースを作成し、感情効果を求め、被服着装上の色彩と図形の知覚要因を明らかにするとともに、平面上と着装上との関連性を追求した。

結果 以上より、知覚閾には形態を表わす物理量よりも、刺激純度、明度などの色彩の要因の方が大きく関与し、そして同じ要因で感情効果も生じることが明らかになった。また、この事実を被服着装上に応用した場合、評価の因子については着装上の感情効果を別に考察する必要があるが、力量・活動性、あたたかさの因子をもつ感情効果は、平面上で見た場合とよく一致し、平面上における感情効果を着装上にも応用できることが明らかになった。